解放と発見の書

ゆずぽん —— コピーライター

『マチルダは小さな大天才』　ロアルド・ダール

コピーライターなのに、最近、小説をほとんど読んでいない。それでも、本が嫌いということではなく、ミーハーなので気になる新刊や、エッセイなどは好きで読んでいる。小説に気がのらない原因のひとつとして考えられるのが、高校生だったころ、先生から“1日1冊読書”のススメがあり、読まなければならないという空気を感じとり、ちょっと無理して読書した反動なのかもしれない。おそらく200冊以上の小説を読んでいたが、その1冊1冊について、感動した、面白かったなどということ以外、ほとんど記憶にない。タイトルさえ覚えていないものもある。しかも、小学生のころから読書感想文が大嫌い。今回、こちらに寄稿することになり、ちょっと困ったな、と正直思ったが、これは読書感想文ではない。先生にも怒られないし、ありがたい機会なので自由に書いてみることにしようと思った。

前置きが長くなった。さて、何の本にしようか。思い出してひさしぶりに読み返したくなり、本屋の児童書コーナーに行って入手したのがこの本、『マチルダは小さな大天才』。小学生から読める本なのだが、高校生の時に偶然出会い、えらく気に入ったのを覚えている。「とにかくスカッとした！」という強烈な読後感があった。ざっくりいうと、才能ある子どもが悪い大人をギャフンと言わせる話で、当時、何かに抑圧されていた自分を解放してくれた。いまあらためて読み返すと、途中の展開なんてすっかり忘れていて、新鮮な気持ちで楽しむことができた。子どもでも、大人でもすぐにその世界へ引き込んでくれる。

ちなみに、私の好きな歌手、宇多田ヒカルも愛読書のひとつとして、この本を紹介している。好きな人と同じ本が好きなのは、ちょっとうれしい。宇多田も何かに抑圧されていたのだろうか、などと勝手に想像してしまう。あるとき、好きなマンガ『ジョジョの奇妙な冒険』を描いた荒木飛呂彦が影響を受けた本として、『チョコレート工場の秘密』（映画『チャーリーとチョコレート工場』の原作）をあげており、気になって買ってみると、なんとこの本と同じ作者ロアルド・ダールだと知る。静かな興奮。好きなものが偶然つながっていたり、いろんな発見があったりすると、また小説を読んでみてもいいかなとも思う。